

にせず歩く 八月号・依 万智

セルクルの型を抜く時しらしらと魚うまの身肉は

ひかりに目ざめる 佐佐木朋子

十一ねんぶりの田植系ぞあをやぎの葛尾村の

田んぼよろこぶ

本田 一弘

女郎屋の名残りをとめる町屋より出できて昼

の影わたる犬

木場 陽子

レモン色のカッパは翼五月雨をウーバーイー

ツすりぬけてゆけ

松本ちえこ

船場町過ぎて親船町に入る車窓の風音かぜおと聞き分

担当させて頂いた作品評は、コロナ禍中

に始まり、いまだ完全な収束は見えないま

まで一年が過ぎようとしています。作品の

うしろに流れているだろう、感染症により

制限された生活の影響を、どれくらい感知

すればよいのか。深読みし過ぎず、けれども

一首が抱えているニュアンスを見逃さない

ようにと、迷いつつ読む日々でした。結社誌

を丹念に読むことは、作者の身に起こった

ことを一緒(数か月遅れにはなりますが)に

体感することなのだ、と実感しました。介護

真っ只中の人、コロナ禍で会えないまま家

族の死を迎えなければならぬ人、仕事も

家庭も不調の人、入院し手術した人、子ども

が生まれた人、ひとりの時間を過ごしてい

る人、東日本大震災から十年を重ねてきた

人。それぞれの人生の時間を感じながら読

けながら 九月号・小林 優子

海外に旅したことのない母とカーペンターズ

聴く屋下がり

西村 三智

・午前五時じやが芋畑の前に立つ畝うねゆつく

りと呼吸している 伊東 美穂

・夕空にトンボとぶ飛ぶ低く高く明日は小

松菜蒔かうと思ふ 一月・新井 勝

・萌葱色の玉葱苗は天を指し一本一本冷え

て光りぬ 二月・尾上 宏

・大根の残りし去年の種を蒔く次々芽の出

で双葉の戦ぐ 三月・梶原まち子

・日を背せに老いが短く鋤つかふ久々ぬくき

大根畑 四月・鳥山 順子

一年間、よい歌すべてに触れられたのか

自信はありませんが、自分の短歌の読み方

がくつきりした形を持てた、そんな気がし

ています。迷いながら読む日々の中に頂戴

したお便りやお葉書は、励みになりました。

日またサラリーマン 十一月・麻木 直